

ワークショップ型子育て支援事業を通じた 保育者養成教育実践の課題

—保護者は、「こども講座」に、何を期待し、何に満足したのか?—

広瀬 健一郎

キーワード：保育者養成、子育て支援、保育技術、こども講座

こども学フィールドワーク

はじめに

「こども講座」(鹿児島純心女子大学こども発達臨床センター主催)は、音楽遊びや工作遊び等を親子で楽しむワークショップ型の講座である。この「こども講座」に、正課授業科目「こども学フィールドワークⅠ(学外)」(1年次対象科目)の学生を、指導補助員として携わらせてきた。筆者は、林愛子講師の監督のもとで、2008年度から2010年度の3年間、「こども講座」の運営および学生指導に携わった。本稿は、2009年度に実施した「こども講座」の取組みを検討対象として、保護者の満足度という点から省察し、今後の「こども講座」の企画・実施に向けた課題を明らかにするとともに、「ワークショップ型子育て支援」事業を通じた保育者養成教育実践のあり方について、「支援」を受ける保護者の視点から課題を導出しようとするものである。

大学に親子を招いて「講座」ないしワークショップを行うという形態の「ワークショップ型子育て支援」については、これまでに様々な大学で取り組まれている。取り組み内容についても報告書、研究紀要、学会発表などを通じて発表されており、取り上げられるテーマも様々である。いずれの論文も参加者の満足度が高いことや保育者としての専門性を向上させるものであること等、各々の取組みの成果や今後の課題を論じている。

しかしながら、ワークショップ型子育て支援事業が保護者ないし親子を対象

としているにも関わらず、保護者の視点から保育者養成教育実践のあり方を検討する研究は稀である。たとえば東海女子短期大学の「あそびの森」の取組みに関する論考では（若杉他、2006）、プログラムの有効性として「保育者としての専門性の向上」、「学生の人間性の育成」、「次世代の親としての自覚促進」、「地域への貢献」を挙げているが（58-59頁）、参加者の声を拾っているのは僅かに「地域への貢献」について論じた部分に限られている。しかもそこでは、親同士の情報交換や大学からの情報提供、子どもの遊び場が提供されたことに対して高い評価があったことを指摘するに過ぎない。

西九州大学の「親子いきいき広場」の取組みに関する論考では（川邊他2009）、「保護者アンケート」を取り上げ「学生による遊びの提供」に対する「保護者」の感想を分析しているが、そこでの主眼は、「学生による遊びの提供」から、「保護者」が何を学んだかを論じることに置かれ、「保護者」のニーズを踏まえた保育者養成教育実践のあり方を論じることはない。ただし、わずかに「保護者向けアンケートの回答に『学生との対話の充実』を求める声があった」として、「対話時間を確保する為のタイムスケジュールの組み方は今後の課題になる」と述べていることは（129頁）、本稿の課題に照らし、注目に値する。対話に何を期待するのか、なぜこのような対話の充実を求めるのかといった点の考察はないものの、ワークショップ型子育て支援事業を通じた保育者養成教育実践の課題を指摘しているからである。

名古屋短期大学専攻科の正課授業「子育て支援実践」の取組みに関する論考では（白幡・森本 2008）、「親へのアンケート」の内容を取り上げている。ここでは、「声の大きさ」や「分かり易さ」、「言葉づかい」、「時間配分」、「内容」に対する3段階ないし4段階の評価から、学生の達成度を測っている。また「親へのアンケート」を踏まえて、学生たちに、自身の「やり方の課題を検討」させている。しかしながら、これらの項目はあくまでも学生の保育技術に対する評価であって、ワークショップ型子育て支援事業に参加する保護者のニーズが何であり、そうしたニーズに応えるためにどのような技術が必要なのかを考察するものではない。

順正短期大学の「なかよし広場」の実践に関する論考においても（柴倉他 2008）、保護者へのアンケート結果を取り上げている。そこでは保護者の満足度のほか、保護者の「感想や意見」を取り上げているが、「なかよし広場」の何が保護者を満足させたのか、とりわけ学生のどのような関わりが保護者を満足させることになったのかについて考察してはいない。わずかに「参加時刻」が「自由」であることと、「学生の笑顔や若さ、子どもへのかかわり方が子どもや保護者にとって拠り所」となっているとの記述があるのみである（100頁）。これらが保護者の満足の大きな要因であるとしても、どのような「子どもへのかかわり方」が「保護者にとって」どんな「拠り所」となっているのかを本文から読み取ることは困難である。

全国の大学で様々なワークショップ型子育て支援事業が行なわれ、実践報告や論考も多数発表されているにも関わらず、親がこうした大学主催のワークショップ型子育て支援事業に何を求めているのかという視点から、保育者養成教育実践のあり方を検討した論考は、筆者が調べた限りではあるが、未見である。子育て支援事業を通して保育者養成を行なう以上、子育て支援事業に寄せる保護者の思いに即した支援技術を明らかにし、学生に習得させる必要があるのではなからうか。そのような技術を習得してこそ、単なる保育イベントではなく、他ならぬ「子育て」を「支援」することになるのではないか。このような問題意識から、本稿は、本学こども講座で配布・回収した保護者向けアンケート（本学・林愛子講師作成）の記述を資料として、親がどのような動機で「こども講座」に参加したのか、親は学生のどのような実践に満足感ないし不満を抱いたのかを明らかにし、ワークショップ型子育て支援事業を通して学生に指導すべき、あるいは、学生が身につけるべき保育技術は何かを考察することを課題とする。

アンケートは、講座受付時に配布し、講座終了時に記入を求めた。参加した45組の親子のうち、41組から回答を得た¹。ただし、このうち14組は、複数回にわたって受講している。参加した親子の実数は、29組である。なお、無記名での回答を御願いたしたために、複数回参加した者の回答用紙を特定することが

できなかった。したがって、本稿で示す人数は、すべて「のべ人数」であることをお断りしておく。

本稿の分析対象とするのは、下記の質問への回答である。

- ・ 本日の講座に参加したときのお子様の様子はいかがでしたか
- ・ こども講座の時間はお子様にとって、適当でしたか
- ・ また、こども講座に参加したいと思いますか
- ・ こども講座の情報はどこで知りましたか
- ・ 今回の講座へ参加しようと思ったきっかけがあれば理由をお聞かせください
- ・ 今回の講座についてのご意見をお聞かせください
- ・ 今後、こども講座で企画してほしいものはありますか

1. 「こども講座」の梗概

まず、行論に必要な範囲で、「こども講座」の梗概を説明しておく²。2009年度のこども講座のテーマおよび参加者数は表1のとおりである。

表1. こども講座の日程および参加者数 (2009年)

日時	講座名	内容	参加者数
6月27日	音楽で遊ぼう①	バンブーダンス	大人 14
		トーンチャイム等	こども 23 計10組
7月4日	おもちゃであそぼう	水車のふね	大人 11
		ぱっくり怪獣等	こども 16 計9組
10月3日	音楽で遊ぼう②	バンブーダンス	大人 12
		トーンチャイム等	子ども 19 計12組
11月7日	おもちゃをつくろう	ペンギンのおもちゃ	大人 12
		クラゲのおもちゃ等	こども 14 計14組

注 () 内は子どもの人数。

「こども講座」は、「親子参加型の体験学習講座」で、「2～8歳」の「子どもと親」を対象とする（鹿児島純心女子大学 2009a）。講師を本学こども学科

教員がつとめ、「こども学フィールドワークⅠ」を受講した学生（2009年度は全員1年次学生）が講師の補助を行う。ただし、補助とは言っても、司会・進行は学生に任せられており、「音楽であそぼう」の場合は、講師による主活動の前後に学生企画の時間が設定されている。学生企画の時間には、講座のテーマに合った音楽活動を企画し、たとえば「音楽であそぼう①」では、映画『ぼにょ』の主題歌に合わせた創作ダンスや、『雨降りクマの子』（作詞：鶴見正夫、作曲：湯山 昭）の合唱が行われた。壁面も、このような歌に合わせたもので装飾されていた。「作ってあそぼう」の場合は、何を作るかについては講師との相談によって決められるが、講師が話をする場面は講座の冒頭における趣旨説明と閉会に際しての講話に限られており、環境構成（壁面制作を含む）や進行のほぼすべてが学生に委ねられている。工作レシピと名づけた作業工程説明書も、学生の手作りである。したがって、学生は、補助ではあっても、主体的に企画・運営する力が問われるものである。

学生は「メインチーム」と「サブチーム」に別れ、学生企画の計画、準備を「メイン」が中心となつてすすめ、「サブ」は、人手を要する作業の補助や当日の会場設営の手伝い、学生企画時の支援を行う。学生は必ず「メイン」と「サブ」を1回ずつ経験する。これは、リーダーシップをとる経験と、積極的に補助を行う経験の両方を積ませようという意図からである。学生は概ね自分が担当する講座の1～2ヶ月前より準備をはじめ、適宜、企画会議をもち、本学教員に助言を求める。企画会議においては、学生は保育指導案を作成する。ほとんどの講座で、講座の1週間前頃よりリハーサルを行い、通常、当日の開始2時間前まで行われる。「こども講座」終了後は反省会が行われ、反省の内容を日誌に記録する。以上のように、学生には、「企画、準備、運営、反省の全行程に主体的に参加していく」ことが求められている（鹿兒島純心女子大学2009b：70）。

2. なぜ、「こども講座」を受講したのか

親たちは、「こども講座」に何を期待したのか。アンケートの記述から、契

表2. 「こども講座」に参加した契機や動機

参加の動機	
①子どもの興味・関心に応えたい	③子どもと過ごす時間を大切にしたい
・子どもが音楽に興味があるから。(2)	・休日はダラダラと過ごしがち。(2)
・子どもが参加したいと言うから。(1)	・親子で一緒に楽しめる機会。(2)
	・親子で物作りがしたかった。(1)
②子どもの経験をより豊かにしてあげたい	・子どもとゆっくりかかわる時間を設けたかった。(1)
・いろいろな子どもと一緒に遊ぶ機会をつくりたい。(3)	・時間があった。(1)
・いつもと違う場所での遊びや人との関わりをもたせ、楽しませたい。(3)	
・子どもの遊びの幅を広げてあげたい。(1)	④その他
・いろいろな経験をさせたい。(1)	・思う存分、遊べる機会だと思った。(1)
・音楽の世界に触れ、楽しんで欲しい。(3)	・保育士資格をとりたい。(1)
・物作りを楽しませたい。(2)	・こども学科なので子どもに積極的に関わってくれると思った。(1)

回答総数36人 アンケート総数41人

表中の文言は、文意を損ねない程度にアンケートの記述に修正を加えた。また同種の記述はひとつにまとめ、()内にその人数を示した。

機や動機と呼べるものを拾うと、大きく3つに分類可能である(表1)。ひとつは、「子どもが参加したいと言うから」、「子どもが音楽に興味があるので」といった子どもの興味・関心に応えようとするもの、二つには、「みんなと一緒に楽しむことを学んで欲しくて」、「子どもの遊びの幅を広げてあげたい」、「音楽を楽しんで欲しい」、「物づくりの楽しさを学んで欲しい」、「いろいろな経験をさせたい」など、子どもの経験をより豊かにしたいというもの、三つには、「休日ダラダラ過ごしがちなので」、「親子で一緒に楽しめる機会があれば」、「子どもとゆっくり関わる時間を設けたかったから」など、親子で過ごす時間を大切にしたいというものである。

子どもの興味関心に応えたり、子どもの経験を豊かにしたりしたいだけでなく、親子の時間を大切にしたい旨を記述した者も少なからずいた。「いろいろな子どもと一緒に遊ぶ機会をつくりたい」旨の記述の中には、「他の子どもと遊ぶことが殆どない」という記述があった。このような記述から、「こども講座」の内容は、よりよい子育て環境を提供したい、子どもと向き合う時間

を持ちたいという親の願いに応えるものであったことが窺える。

参加動機の中には「保育士資格をとりたから」という記述もあった。「こども講座」に保育の専門性を学ぶことを望む声がある。また「こども学科の学生さんはきっと、子ども好きな方だと思い、たのしませてくれそうだったので」という参加動機を書いた者がいる。子どもに積極的に関わり、楽しませるといふ、その意味で基礎的な保育技能が、学生には求められている。学生は、保育者の「卵」なりの専門性が求められているということを自覚する必要があるだろう。

3. 親にとって、満足のいく講座だったか

①親は満足したか

まず、表3に「お子様の様子はいかがでしたか」（楽しそうだった・いつもどおり・楽しそうではなかった）、「こども講座の時間はお子様にとって、適当でしたか」（もっと長くてよい・ちょうどよい・もっと短くてよい）、「また、こども講座に参加したいと思えますか」（また来たい・どちらでもよい・もう来たくない）に対する回答状況を、回ごとに示す。

表3. 親の満足に関する質問

	楽しそうだった	時間はちょうどよい	また来たい
第1回 音楽で遊ぼう①	12 (13)	12 (13)	13 (13)
第2回 おもちゃで遊ぼう	10 (10)	10 (0)	10 (10)
第3回 音楽で遊ぼう②	9 (10)	7 (10)	11 (11)
第4回 おもちゃをつくろう	8 (8)	8 (8)	8 (8)

第1回「音楽であそぼう①」に参加した親1名と第3回「音楽で遊ぼう②」に参加した親1人の計2人を除いて、わが子が「楽しそうだった」と回答した。「時間はお子様にとって、適当でしたか」の質問には、第1回「音楽で遊ぼう②」に参加した親1人が「もっと長くてよい」と回答し、第3回「音楽で遊ぼう②」に参加した親2人が「もっと長くてよい」、同1人が「もっと短くてよい」と回答した他は、「ちょうどよい」と答えた。この「もっと短くてよい」と回

答した親は、「お子様の様子はいかがでしたか」の問いに答えなかった親である。もっと長くてもよいという回答は、もっと遊ばせたい、楽しませたいという希望を示したものであろう。このようなデータを見る限りでは、殆どの親にとって、子どもたちは「楽しそう」に見え、設定時間も「ちょうどよい」ものであったようである。また、全ての回で、回答者全員が「また来たい」と答えていた。このことから、講座を満足してもらえたと受け止めてよいだろう。

しかしながら、2人とは言え、講座内容を楽しめなかった、ないし不満をもったことも事実である。2人の内、第1回目に参加した親は、「お子様の様子はいかがでしたか」に対して、子どもは「いつもどおり」と答えた。ただし、「いつもどおり」の「いつも」の意味内容はよくわからない。「いつもどおり」楽しそうだったかもしれない。第3回「音楽で遊ぼう②」に参加したもう一人の親は、「子供の年齢の幅が大きすぎ」で、「笛とハンドベル」は「むずかしく感じました」との記述を残した。笛やハンドベルは、この子にとって難しすぎたのかもしれない。子どもの年齢にあった遊びを提供されず、子どもが楽しんでいるように思えなかった親には、こども講座は、苦痛な時間となったようである。その結果、「この内容で500円は、高いような気がします」との不満を記述するに至っている³。それでも、この親は、「また来たい」と答えていた。不満だけが残ったのではないと考えたい。

②親は何に満足したか

それでは、親は講座のどのような内容に満足したのか。「今回の講座についてのご意見をお聞かせください」に寄せられた記述をもとに考察する。講座内容への「満足」を示唆する記述を表4に整理した。

もっと多かったのは、「親も一緒に楽しめました」、「親子で楽しめました」のように、親子で一緒に楽しめたとの思いを表明した記述である。これは、多くの親が、「親子で過ごす時間を大切にしたい」という受講動機を語っていることと対応する。その意味で、今年度の講座は、親の期待に応え得たと言ってよいだろう。

表4. 「満足」を示唆する記述

<p>子どもと一緒に楽しめて嬉しい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親と一緒に楽しめた(6) ・ふだん使わない道具と一緒に使うことができ楽しかった(1) ・子どもと一緒におもちゃを作れてよかった(1) ・とても楽しい時間だった(3) 	<p>学生が子どもに関わってくれて嬉しい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・根気よく相手してくれて嬉しかった(2) ・学生が上手に教えてくれて楽しそう(1) ・学生が子どもとコミュニケーションをとってくれるので良かった(1) ・子どもに接してくれたことがとても良かった ・子どもに声をかけてくれて楽しい時間でした(1) ・手遊びをしてくれたり、話しかけてくれたのが楽しかった(1)
<p>子どもが楽しく過ごしていて嬉しい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが喜んでいて楽しそう(1) ・音を楽しめているようだった(1) ・楽しくおもちゃをつかっていた(1) ・難しいと思ったけど、子どもには新鮮だったようだ(1) 	<p>学生への謝辞とエール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生がいてくれて助かった(1) ・学生がとても親切(1) ・材料など、準備してくれて助かりました(1) ・先生や学生が一生懸命(1) ・いい経験になるよ(1)
<p>子どもの意外な面に驚いた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の話をよく聞き、楽しんでいる事に驚いた(1) ・学生の言うことを聞き、活動している姿に音楽の不思議な力を感じる(1) 	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろんな楽器に触れる事ができてよかった(1) ・気軽に参加できた(1) ・先生のお話を楽しく聞いた(1) ・プレゼント、嬉しかった(2)
<p>学びを生かしたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育士なので、子育てや保育に生かしていきたい(1) ・指遊びや歌、家でもできそう(1) 	

凡例

回答人数29 アンケート総数41人

・表中の表現は、アンケートに記述された文言を、文意を損ねないように修正したものである。

・太字の見出しは、広瀬が付けたものである。

・() 内は、同種の発言をした者の人数を示す。

「子どもが楽しそうだ」、「音を楽しめたようだった」、「楽しくおもちゃをつくれた」等、子どもが楽しむ様子に喜びの声をあげる親もいた。さらに「親が手を出さなくても、大学のお姉さんや先生の話聞いて楽しんでいる事に驚きました。うれしくなりました」という、わが子の意外な一面に出会い、喜ぶ親がいた。また、別の親は、学生の話をも熱心に聞くわが子の姿を見て、「音楽の不思議な力を知りました」と書いた。親子で楽しむだけでなく、何より子どもが楽しみ、喜ぶ姿、さらには成長している姿に出会えたことが、「また来たい」という思いへと繋がったのであろう。

今ひとつ、「また来たい」という思いを支えていることとして、学生が、子

どもと関わってくれたこと、そのこと自体が、嬉しいことだったということがある。いくつか例をあげると、「お姉さんたちも子供に声をかけてくれて、楽しい時間でした」、「製作の時も親切に学生さんたちが子どもたちに教えてくれたり、話しかけてくれたので、楽しかったです」、「学生さんが上手に教えてくれていて楽しそうで、良かった」、「お姉さんたちが、子供とすごくコミュニケーションをとってくれるのでとてもよかったです」といった記述がある。第三回の「音楽で遊ぼう②」では、「小さい子どもには少し難しいかな～と思える企画があった」けれど、「こんき良く相手をしてくれてうれしかった」と述べた親がいた。企画の適否はもとより重要なことではあるけれど、子どもと真剣に向き合ってくれる学生の姿が、親に喜びをもたらしていたのである。

講師や学生、とりわけ学生に謝意やエールをおくる記述も散見された。「お姉さんがいてくれて助かりました」、「学生さんたちがとても親切」、「先生や学生さんが一生懸命」といった記述があった。2件だけであったが、アンケートの欄外に学生への謝辞やエールが書かれていた。そのうちの1つには、次のようにあった。「学生さんたちががんばって。いい経験になるよ」。このように、「また来たい」という講座への満足を根拠で支えていたのは、学生の「一生懸命さ」であったと言っても過言ではないだろう。学生の「一生懸命」な準備や実践、そのために注いだ努力は報われたのである。

この他の記述には、「気軽に参加できた」という感想がある。気軽に参加できるような内容であることも、「また来たい」と思ってもらうには大切なことであろう。「保育士なので、子育てや保育に生かしていきたい」との記述は、保育士にとって耐えうるだけの専門性を備えた内容だったと思え、主催者の一人として有り難い。「いろいろな指遊び、歌など」「家でもできそう」との記述からは、こども講座が、単に講座に参加して完了するのではなく、家庭で、あるいは職場での「子育て」に繋がっていくような内容を考えることの重要性を示唆していよう。

4. 親たちから学生への助言

ところで、親たちは、題材の難易度や材料の適否、学生の歌や作品、進行の良し悪し等、「こども講座」の内容そのものにはどのような感想をもっていたろうか。これに関しては、回答者数は9人と少なかった(表5)。しかも、肯定的なコメントは、「雨降り熊の子、とてもよかったよ」、「ちょうどよいレベルの手作りおもちゃだった」の2件があるのみであった。一方、学生に具体的な助言を記述したものが7人の親から8件寄せられた。「年令を区切って設定してはどうか」、「作り方レシピに絵やイラストを入れて小さい子でもわかるようなものを」、千枚とおしを使うならデスクマットのようなやわらかな台を用意して欲しかった、船を浮かべて走らせるにあたって、「水を触らないお約束が先に必要だった」などの指摘は一々もともとであり、貴重な内省の材料である。さらに、「もう少し声を大きく、プロになる意識をもって頑張ってもらいたい」との記述もあった。この記述は保育士あるいは幼稚園教諭の方のものであろうか。学生に期待するからこそそのエールと受け止めたい。

表5. 「こども講座」の内容についての批評

<p>肯定的評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「雨降り熊の子」とてもよかった。(第1回) ・ちょうど良いレベルの手作りおもちゃだった。(第4回) <p>改善点の指摘</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バンブーダンスのリズムが違うのではないか。(第1回) ・船を走らせる時、水を触れないお約束が先に必要だった。(第2回) ・もう少し声を大きく、プロになる意識をもって欲しい。(第3回) ・音楽は、わが子には難しすぎたかもしれない。(第3回)。 ・年齢を区切って、講座の内容を設定してはどうか。(第3回、第4回) ・千枚通しを使うなら、デスクマットのような柔らかな台を用意して欲しかった。(第4回) ・作り方レシピに絵やイラストを入れて、小さい子でもわかるようなものにして欲しい。(第4回) ・もう少しリードしてくれるとよかった。(第4回)

回答総数 9人 アンケート回答総数41人

注

- ・表記は、アンケートの記述をもとに、文意を損ねない程度に改めた。見出しは広瀬が付した。
- ・() 内には、何回目の講座かを示した。

まとめ

以上の考察から、ワークショップ型子育て支援事業を通じた保育者養成教育実践において、学生が身につけるべき保育技術をまとめると以下ようになる。

- ①「こども講座」は、親子で楽しむ時間であり、親が子の成長と向き合えるような場であるということである。したがって、講座の内容を考えるときには、子どもだけが楽しむのではなく、親が子どもと一緒に遊ぶための内容と配慮を考え、実践する技術が必要である。
- ②親にとっては、学生が子どもに声をかけ、積極的に関わってくれること自体が喜びであった。また、子どもが楽しむ姿、喜ぶ姿をまのあたりにすることは、親に喜びをもたらすものであった。したがって、学生、とりわけサブチームの学生はこの点をよく自覚して、どうすれば子どもたちが講座を楽しめるのかをよく考え、個々の子どもたちに積極的に関わり、楽しませられるような技術が必要である。
- ③「こども講座」の内容を構想するにあたっては、参加者の年齢を把握し、年齢にあった遊びを考え、実践する技術が必要である。年齢幅が大きい場合には、年齢にあった援助の仕方を考えなければならない。

今ひとつ、親からのアンケートから浮かび上がったものとして、保育技術以前の問題を指摘しておく。

- ①こども学科の学生は、既に、保育者の「卵」とみなされる存在である。他の子育て支援講座とは違い、大学で開催される講座であること、とりわけ、こども学科の学生が主体的に関わる講座であることの意味を考え、自覚することが肝要である。「保育者を目指す学生たちがいるからこそ、楽しめるのではないか」という期待に応える必要がある。そのためには、将来プロフェSSIONナルになるのだという、いわば「プロ意識」をもって取り組むことが、参加者の期待に応えることになる。
- ②何より重要なのは、受講者に少しでも楽しんでもらいたいという想いと、それが伝わるに足る行動である。年齢にあっていない遊びであったにも関わらず、一生懸命に「わが子を援助しようとする姿」を目の当たりにしたことで、

子どもが楽しんでいるように思え、同時に親もまた楽しいと思えた例がある。

以上を一言でまとめるなら、「プロ意識」と親子に楽しんでもらいたいという情熱をもって、個々の子どもに関わること——このことを自覚するとともに、その大切さを、実践を通して実感していけるような指導が、講師とフィールドワークⅠ（学内）の指導者には求められている。声の大きさやスムーズな進行、子どもたちをひきつける話術といった保育技術の習得はむろん重要ではある。しかしながら、大学におけるワークショップ型子育て支援では、「プロ意識と情熱をもって個々の子どもに関わり、遊びを援助すること」があつてはじめて、「子育て」を「支援」するものとして機能するのであり、個々の保育技術は、この前提の上に立ってはじめて力を発揮するのである。

学生が子どもに直接関わっていくことに対して、保護者が「学生」に「子育てを委ね」ることになるのではないかと懸念や、保護者の主体的な参加を妨げることにならないかといった懸念をする向きもあるだろう。たとえば柴倉らは「学生と遊んでほしい」という保護者の「今後の希望」が72%であったことに対して、「子育ての主体が保護者というよりは、学生や本事業に子育てを委ねているとも受け取られ」との見方を示している（柴原他、2008：99頁）。もしそうであるならば、学生が子どもに直接関わることは、「保護者の主体的活動をはぐくむ環境」づくりを志すような取組み（たとえば武山他 2009）とは、相容れないものになってしまう。

しかしながら、本稿の考察からは、そもそも「子育て支援事業」に参加すること自体が「主体的な子育て」の発露なのであり、家族以外の者が、わが子に関わること自体が保護者にとって喜びであつて、しかもそれは普段のわが子とは異なる子どもの育ちを発見する場になり得るものであることが示唆された。したがって、子どもが「学生とたくさん遊ぶ」があつても、それがただちに、保護者の子育てに対する主体性を減退させることになるとは思えない。

子どもと保育者養成におけるワークショップ型子育て支援においては、学生が直接子ども達に関わることを重視するとともに、親子と学生と一緒に楽しむ

ための技術習得にもっと目を向けるべきではないかと提起して、本稿を閉じることとする。

註

- 1 のべ4組の参加者から回答を得られなかった。ただし、このうち3組は筆者と娘であり、考察の客観性をもたせるために、筆者はアンケートに記述しなかった。したがって、実質的に回答を得られなかったのは1組だけであった。
- 2 「こども講座」開設の経緯や問題意識、開設初期の講座内容、学生指導の方法、学生の学び等については、平山・井上（2003、2004）に詳しい。
- 3 この500円は保険料である。

参考・引用文献

- ・平山久美子・井上朋香(2003)「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告(学内企画)」、『こども学研究 こども発達臨床センター紀要』第1号、鹿児島純心女子大学・短期大学・こども発達臨床センター、1-21頁。
- ・平山久美子・井上朋香(2004)「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告(学内企画)第2報」、『こども学研究 こども発達臨床センター紀要』第2号、鹿児島純心女子大学・短期大学・こども発達臨床センター。1-22頁。
- ・鹿児島純心女子大学(2009a)『フィールドワークⅠ(学内企画)実習ノート』、鹿児島純心女子大学国際人間学部こども学科。
- ・鹿児島純心女子大学(2009b)『2009 Syllabi』、鹿児島純心女子大学国際人間学部こども学科。
- ・川邊浩史・米倉慶子・田中麻里・川邊久美子(2009)「保育者を目指す学生と子育て支援(2)-新校舎を利用した実践報告-」、『永原学園西九州大学短期大学部紀要』第40号、125-130頁。
- ・柴倉初美・塩見優子・加藤由美・藤井伊津子(2008)「子育て支援事業『なかよし広場』の取組-子ども・保護者・学生の相互作用からみた支援のあり

方]、『順正短期大学研究紀要』第37号、85-103頁。

- ・白幡久美子・森本美絵（2008）「学生と親との協働による地域子育て支援の効果—『子育て支援実践』科目への評価から」、『名古屋短期大学研究紀要』第46号、151-163頁。
- ・武山隆子・滝川孝子・高橋一行・榎田二三子・義永睦子（2009）「養育力をエンパワーメントする環境づくりと活動の展開—子育て支援室における取り組みと保護者、学生の学び—」、『武蔵野大学人間関係学部紀要』第6号、229-243頁。
- ・若杉雅夫・篠田美里・長谷部和子・杉山喜美恵・瀬地山葉矢（2006）「子育て支援プログラム『子育て親育ち・学生の心の育成』—あそびの森の試み—」、『東海女子短期大学紀要』第32号、53-60頁。